〔国宝「寝覚物語絵巻」と平安・鎌倉の美術展によせて〕

国宝「一字蓮台法華経」見返絵をめぐって

「普賢菩薩勧発品」は、『法華経』二十八品の最後にあたり、普賢菩薩が法華持経者を守護することが説かれます。当館に所蔵される「一字蓮台法華経」は、「勧発品」を美麗な料紙に書写し、かつ、経文の一字ずつを一仏に見立てて蓮台に安んじます。見返しには、貴族の邸における法会の様子が物語絵を思わせる濃彩で描かれています。その制作は、「平家納経」（厳島神社蔵・1164年頃）につぐ、12世紀後半とみられます。ここでは、見返絵について若干の私見を述べることとします。

まず、画面をみて行きましょう。室内には、三人の僧があり、左右二人の僧は、脚台付きの経箱を前に一巻の経を手に執り、読み上げます。経箱内の経巻と合せると計八巻となり、これが法華経八巻をあらわしていることが解ります。中央（画面左下方）の目を閉じて経を誦す僧の前には仏台が置かれ、法会の本尊画像が安置されているとみられます。縁には、烏帽子を戴く若い貴族を中心に、市女笠の女性、僧形の男性が二人ずつ描かれます。男性貴族の左には、淡緑色の衣を被いだ少女が配されます。法会の参加者の視線が左下方へ注がれる中で、少女の視線は逆へ向い、その先には松の枝があります。この視線の相違は、観る者の眼を自然と少女へ引き付け、少女と画面の中央に位置する貴族、その隣に大きく描かれた僧の姿が、画面の中心を成すとの印象を与えます。特に僧に注目し、これを後白河法皇に準える説（矢代幸雄、白畑よし両氏）もあります。魅力的な説ですが、私見では、貴族の信仰生活に経意を重ね、さらに三人の姿に『源氏物語』の一篇を読み込んだ図様と考えられます。

貴顕の信仰生活を見返絵に描いた例としては、「平家納経」の「序品」、「勧持品」が想起されます。特に前者においては、画中の経箱の形態が、「平家納経」を納めた「金銀荘雲竜文銅製経箱」と近似し、「平家納経」の奉納を象徴した図様とみられ、「一字蓮台法華経」に描かれた法華経八巻もこの経の奉納を象徴する図様である可能性があります。

経の内容と見返絵との関係について、「一字蓮台法華経」は、特異な例とされています。現存遺例を見渡しますと「勧発品」の見返しには、持経者を守護する普賢菩薩の影向が描かれるのが一般的です。「一字蓮台法華経」の見返絵についても、法会は、法華経信仰を象徴する図様であり、我々からは見えない仏台には普賢菩薩像が懸けられたものとして描かれたとされています。このような機知に富んだ図が描かれたことは、当時の法華経理解の深さを象徴して大変床しいものに思われますが、ここでは敢えて別の解釈を試みたいと思います。

見返絵における法会の絵画化が、極めて珍しいことは、従来指摘されている通りです。但し、より単純に図様の近似という点からみますと紺紙金（銀）泥経の見返絵に僧の読経とその聴聞という図様を見出せます。例として、鎌倉時代初期の「慈光寺経」（埼玉・慈光寺蔵）のうち「勧持品」（法師品との錯簡）には、「法師品」に説かれる法華経を読・誦・書写・解説・受持する「五種法師」が仏堂内に描かれ、これを聴聞する俗形や神将形が庭前に描かれます。また、平安時代末の奈良・談山神社「法華経宝塔曼陀羅」第四幅には、仏堂内で経を読誦する五人の法師が描かれます。同じく、高野山金剛峯寺「法華経」のうち「法師品」には、仏前で経を読誦する四人の僧が描かれます。このように法師品見返絵には、法会の場を思わせる僧の姿を描く例があります。

『法華経』巻四「法師品」第十には、「もしわが滅度の後に能くこの経を説かん者には、われは化の四衆たる比丘・比丘尼と及び清信の士・女とを遣わして法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して、これを集めて法を聴かしめん」と説かれ、法華経を説く法師とそれを聴聞する聖俗の男女という図様をここから想定することも出来ます。「一字蓮台法華経」に計五人の僧形が描かれることも「五種法師」を思わせるものです。さらに細部に注目しますと、経箱に並んだ経巻の巻緒の状態から僧の手に執る巻が法師品を含む巻第四にあたることも解り、注意されます。

さて、本巻が制作された12世紀末には、紫式部を一品経を以て供養する「源氏供養」が行われていました。その一品経の見返しには「源氏之一篇」を図したことが知られます。すなわち、源氏五十四帖を法華経二十八品に宛て、見返絵の図様としたとみられます。詳述は避けますが、第十番目の法師品には、『源氏物語』の「明石」が宛てられたとされます。以上、推測を重ねましたが、「一字蓮台法華経」見返絵の内容が法師品と深く関わるとすれば、その中心を成す三人は、光源氏、明石の姫君、明石入道を象徴するものかも知れません。勿論『源氏物語』にこの三者が法会に連なる場はなく、また、和歌や今様等にあらわれた法華経信仰における法師品と勧発品との深い関わりを考えますと、以上の想定が、法師品との錯簡問題等に及ぶものであるのかには、さらなる考究が必要とされます。

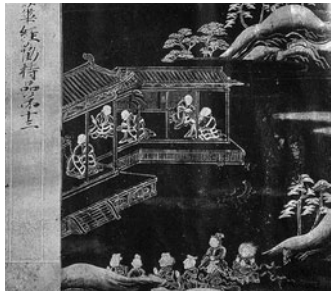
（増記隆介）

一字蓮台法華経見返絵

一字蓮台法華経見返絵・部分

平家納経のうち序品見返絵・部分

慈光寺経のうち勧持品見返絵・部分



季刊 美のたより No.143
平成15年 7 月11日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.